

# 高田屋嘉兵衛と情報処理

公立はこだて未来大学学長

なかしま ひでゆき  
中島 秀之



1983年、東京大学大学院情報工学専門課程修了(工学博士)。同年、電子技術総合研究所入所、人工知能を研究。2001年より産業技術総合研究所サイバーアシスト研究センター長。2004年より公立はこだて未来大学学長。また、認知科学会元会長、情報処理学会副会長、同フェロー。マルチエージェントシステム国際財団理事などを歴任。著書多数。

高田屋嘉兵衛と情報処理にどういう関係があるのか解題はもう少しお待ちいただきたい。

まずは高田屋嘉兵衛のこと。

私は四年前に現職に就いたが、それまで函館はおろか北海道に仕事や親戚の縁はなかった。函館に来て初めて司馬遼太郎の「菜の花の沖」を読んだ。高田屋嘉兵衛は函館の町を造ったと言っても良い人物だ。この本を読むまで、私は嘉兵衛のことを商人だと思っていた。しかし、読んでから嘉兵衛観が一変した。

彼は船乗りだったのである。操船と航海の名人であった。マネーじゃではなく技術者である。

良いリーダーの要件の一つとして、その分野における卓越した技量が挙げられると思う。ホンダの本田宗一郎が一流の技術者だったように、マイクロソフトのビル・ゲイツがすぐれたプログラマだったように、上に立つ人はその下で働く人たちの技量を凌駕していることが大事だと思う。

さて、情報処理の話。

今、一般にITすなわち情報技術ということ、インターネットのことを想起する人が多いと思う。しかしネットはインフラである。その上のサービスを支えている根幹技術が情報処理である。銀行のオンライン取引システム、航空会社の座席予約やチェックインシステムなどでは膨大な情報が処理されている。このようなプログラムを完全無欠に作るのは大変だ。

アメリカの研究者が「複雑系が盛んに研究されているが、複雑系というものの振る舞いについて本当に実感を持っているのは、大きなプログラムのバグ(プログラムの誤り)取り経験のあるプログラマだけではないだろうか」と言っていた。ただし名詞である。複雑で巨大なシステムを他人に説明するのは難しい。複雑なままに説明すると解ってもらえないし、かと言って簡略化すると、そんなに簡単なら問題ないだろうと言われてしまう。実際に経験した人でないと本当のところは理解できないのだと思っている。これが嘉兵衛につながる。嘉兵衛が現場で働いており、そしてその道で

優れた能力を持っていたからこそあそこまで大きな仕事が出来たのだと思う。

英国情報処理学会の会長が「ほとんどのトップの意思決定者―政治、社会、企業を問わず―はITの可能性と限界の両方に関して驚くほど無知であり、ITへの期待は多くの場合全く非現実的である」という趣旨のことを語っていた。このコメントは英国のみならず、多くの国に当てはまる。無理はない、今のトップの人たちが学生だった頃にプログラミングあるいはプログラムを使うを経験した人は大変少ないであろう。ぎりぎりの限界を見極める目というのはやはり現場でしか身に付かないように思う。コンピュータによる情報処理を過信したり、逆に必要以上に嫌ったりせず、トップには是非正しい距離感を持ってもらいたい。もちろんすべての方にプログラム経験を持っていただくのは不可能である。近くにいるそういう人達の意見を聞いていただきたいと思う。

次号は、毎日新聞科学環境部記者 元村有希子氏に  
お願いします。



(敬称略) 小長啓一→野々内隆→根来泰周→石弘光→武藤敏郎→高橋温→増田寛也→西澤潤一→内田盛也→中原恒雄→今井敬→室伏稔→上島重二→西室泰三→依田巽→重延浩→吉村作治→中川武→池内克史→中島秀之

※本コーナーは、弊会ホームページでもご覧頂けます。